

東大寺東塔院跡の調査

—第550次

1 はじめに

東大寺では、『東大寺境内整備基本構想』にもとづき、2014年度から「東大寺境内史跡整備第一期計画」として境内整備事業を開始した。その一環として、東大寺・奈良県立橿原考古学研究所および奈良文化財研究所により史跡東大寺旧境内発掘調査団を結成し、2015年度は境内史跡整備事業に係る発掘調査（東大寺旧境内第164次、第550次調査）として東塔院跡の調査をおこなった。ここではその概略を述べる。

今回の調査では、3ヵ所の調査区を設定した。1区は塔の想定中軸線を西端とする南北方向の試掘トレンチで、回廊北門の位置や規模などの確認を目的とする。2区は塔基壇上東北部（西南四天柱から基壇東北隅にかけて）とその北側・東側の基壇周囲裾部を含み、塔の基壇規模や構造、および周辺施設の解明を目的とする。3区は事前の地中レーダー探査により推定された回廊東南隅部にL字形に設定した試掘トレンチで、南面・東面回廊の位置や規模などの確認を目的とする。調査面積は合計720㎡（1区：104㎡、2区：530㎡、3区：86㎡）である。2015年7月21日に調査を開始し、12月15日に終了した。

2 東塔院の沿革

東塔院は大仏殿院の南東に位置し、七重塔とそれを囲む回廊などからなる。『東大寺要録』や正倉院文書などより、塔は天平宝字8年(764)頃に完成したと考えられる。また、回廊の造営もほぼ同時に進行していたようである。その後、天禄2年(971)に火災の記録があるが（『東大寺要録』）、この時は部分的な破損に留まったとみられる。

治承4年(1180)、平重衡の南都焼討により、東塔院は東大寺の他の堂宇とともに灰燼に帰す。その後、大勧進重源により東塔院の再興が企図されるが、その完成をみずに重源は入滅する。事業は第二代大勧進の栄西、さらに第三代大勧進の行勇へと引き継がれ、1220年代には塔は一応の完成をみたようである（『百鍊抄』『明月記』）。また、やや遅れて回廊も再建されたとみられる。

この再建の塔・回廊も、康安2年(1362)に雷火によっ

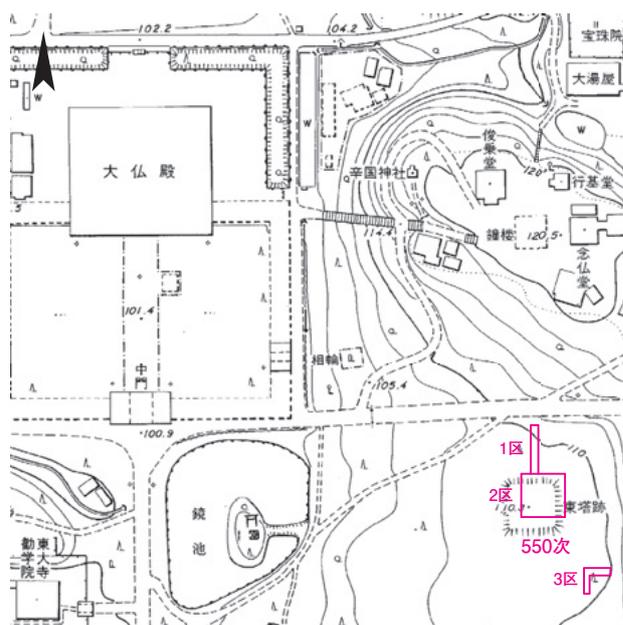


図206 第550次調査区位置図 1:4000

て焼失した（『嘉元記』）。調査前の時点では、塔基壇跡が1辺30m、高さ1.5mほどの高まりとして遺存するのみであった。

以上のように、七重塔・回廊とも奈良時代創建時のものと鎌倉時代再建時のものと、大別して2代が存在したと考えられる。以下ではそれぞれを「創建塔」「創建回廊」、「再建塔」「再建回廊」と称することとする。

3 検出遺構

今回の調査で検出した主な遺構は以下のとおりである。

再建塔 基壇上で、礎石の抜取穴9基を検出した。いずれも直径3.5～4.5mほどで、検出面からの深さは側柱のものが40～80cm、四天柱のものが20～60cmと、側柱の方がやや深い。一部の抜取穴の中には径30～40cmの石が残り、根石の可能性はある（ただし、多くは抜取穴が広く深く掘り込まれているとみられ、礎石据付の痕跡は希薄である）。これにより、塔の柱配置が3間四方であったことが確定した。抜取穴が巨大なため柱間寸法は確定しがたいが、後述の階段幅や、軒の出などを総合的に勘案すると、中央間約6m(20尺)・両脇間約5.4m(18尺)と想定するのが妥当であろう。なお、心礎については想定位置に近現代の遺構表示とみられる石敷きが存し、また四天柱の抜取穴が近接しているため、抜取穴などの見極めは困難である。

また、2区南端に設定したサブトレンチによる断面観察などにより、基壇土の堆積状況を確認した。最上層には、比較的精良な黄褐色粘質土が5cmほどの単位で10～20cmほど積まれている。本来の基壇上面に近い部分の化

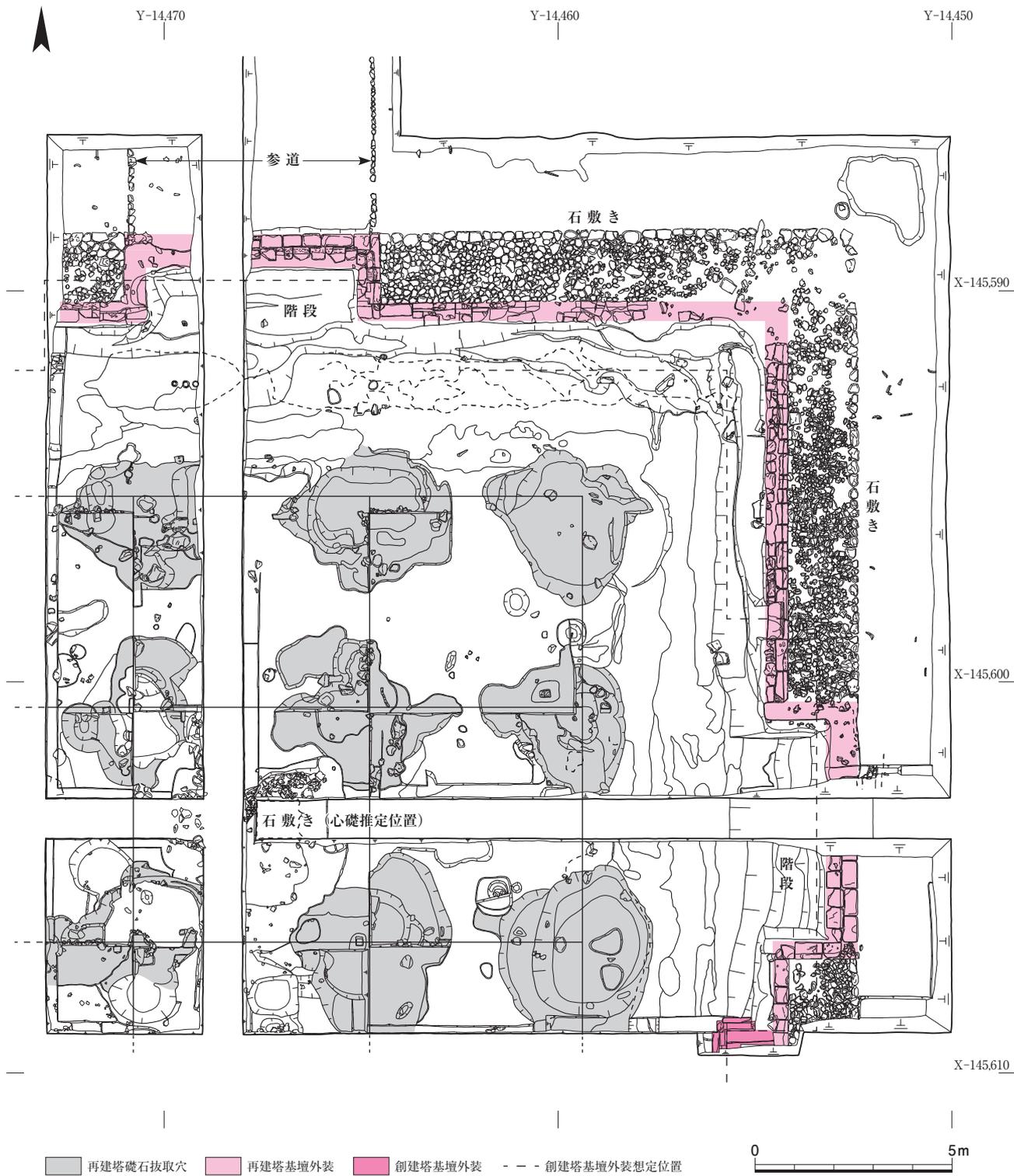


図207 第550次調査2区遺構平面図 1 : 150

粧土のようなものであろう。その下には、黒褐色の焼土を主体とする盛土層がある。こちらは約15cm単位で最大1.5m以上積まれ、しまりはそれほど強くない。治承の焼討により生じた焼土を基壇土として利用したものとみられる。その下では、黄褐色や暗褐色の粘質土が5cmほどの単位で積まれる。地山由来と思われる精良な土質で、遺物をほとんど含まずしまりも強いことから、創建塔の基壇盛土が遺存したものと考えられる。

基壇周囲裾部には、北面・東面とも、凝灰岩製の基壇外装延石列が、一部を除いてほぼ完存していた。階段部分は北面・東面とも1.5m（5尺）ほど突出し、その外側には階段踏石も一部遺存する。これにより、塔基壇の規模は約27m（90尺）四方、階段幅は北面・東面とも約6m（20尺）と判明した。現存する基壇盛土の高さより、基壇高は1.7m以上と見込まれる。さらに、北面・東面とも、延石列の外側には階段の突出と幅を揃える石敷きが施されていた。安山岩の自然石を主体とし、一番外側の見切石は30～50cm、それ以外の石は10～20cmほどである。なお、基壇東面北半に地覆石とみられる凝灰岩製石材が1石遺存するが、その他の基壇外装は後世の攪乱により失われている。

さらに、2区から1区にかけて、南北方向の石列2条を検出した。塔北面階段と回廊北門とをつなぐ参道の縁石であろう。北面階段と幅を揃えることから、再建塔にともなう遺構と考えられる。

創建塔 創建塔基壇は再建塔基壇により全体が覆われ、検出は部分的に留まる。前述のように、再建塔の基壇盛土とみられる焼土層の下の積土は、創建塔の基壇盛土と考えられる。また、2区南端、再建塔基壇東辺やや内（西）側において、凝灰岩製の基壇外装（延石・地覆石・羽目石・東石）を検出した。平面形がL字形に屈曲することから、東面階段の南端取付部にあたることから、ここから推定される基壇規模は約24m（80尺）四方、高さ1.5m以上（羽目石約1.2m、地覆石約0.3m）、階段幅は約10m（33尺）である。階段側面の羽目石は上面が斜めに加工され、階段の傾斜を押し量る手がかりとなる。羽目石や東石は表面上半が剥離し、下半は赤色や黒色に変色している。治承の焼討による被熱の痕跡であろう。

再建回廊 3区において、東面回廊の東西両雨落溝を検出した。現状で、西雨落溝は幅2m、深さ90cmほど、

東雨落溝は幅2.8m、深さ30cmほどである。埋土には多量の瓦片が含まれ、再建回廊にともなう遺構と考えられる。両溝の心心間距離は約9mで、回廊基壇幅は7m前後と推察される。また、南面回廊の北雨落溝（幅2m、深さ50cmほど）も検出したが、調査前の想定よりも南側に位置していた。したがって、南面回廊南端は3区南端よりも南方に位置すると考えられ、南雨落溝は確認できなかった。

1区において、回廊北門の北雨落溝を検出した。現状で幅約2m、深さ40cm以上、埋土には多量の瓦片が含まれ、再建回廊にともなう遺構と考えられる。南雨落溝は検出されず、当初より開削されていなかった可能性が高い。ただし、前述の参道縁石が途切れる地点、およびそのすぐ北側で地山面が一段高くなる様相などから、北門南辺の位置のおおよその推定は可能であり、北門基壇の南北幅は9m（30尺）前後とみられる。

東面回廊は地中レーダー探査による想定とほぼ同位置で検出したが、南面回廊はそれより南側、北面回廊は北側に存したことが判明した。なお、創建回廊の存在を直接に示す痕跡は希薄である。おそらく、再建回廊は創建回廊の位置をほぼ踏襲しながら造営されたのであろう。

4 出土遺物

整理用コンテナ約4000箱分の瓦片（丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦およびその他の道具瓦、磚など）が出土した。大部分は鎌倉時代に属し、奈良時代のものも一部認められる。大半は塔基壇周囲裾部の現代の堆積層からの出土であるが、近世以降のものはきわめて少なく、東塔院に直接関わる遺物とみられる。

その他には土器片（整理用コンテナ5箱分）や風鐸片（10点以上）が出土し、また鉄製品（釘・鏝など）も数点出土しているが、遺物はすべて洗浄・整理作業中であり、詳細については今後の調査の進展を待ちたい。

5 まとめ

今回の調査による主な成果は以下のとおりである。

まず再建塔について、その規模や構造などをあきらかにした。基壇外装延石列の検出により基壇規模が判明し、礎石抜取穴の検出により塔の柱配置が確定した。柱間寸法の復元に関わるデータを得たこと、基壇が創建塔



図208 回廊北門と参道の東縁石（1区、南西から）



図210 2区全景と大仏殿（南東から）



図209 3区全景（北西から）



図211 四天柱礎石の抜取穴（2区、北から）

のものより一回り大きく築成されていたことがあきらかになった点も、大きな成果といえよう。

創建塔についても、基壇外装石材の検出により、基壇規模や基壇高を推察するにいたった。また、東面階段の幅を推測しえたのも貴重な成果である。創建塔の階段幅は再建塔のそれより広く、かつ再建塔の柱筋に合致しないことから、創建塔と再建塔とでは柱配置や建物構造などが大きく異なっていた可能性も考えられる。

再建回廊に関しても、雨落溝の検出などにより、その位置をほぼ特定しえた。それにより、東塔院の全体規模が調査前の想定よりも南北方向に長大であり、また現地地形がある程度反映していることが判明した。

一方で、未解決の問題も残されている。例えば再建塔については、鎮壇具の有無や心礎の据付・抜取の様相の再確認、階段構造のさらなる追究などが求められよう。また、創建塔や回廊については、今回は柱そのものに関わる痕跡を確認するにはいたらず、建物構造の解明には課題が多い。東塔院跡の発掘調査は2016年度以降も継続的におこなっていく予定であり、これらについては今後の調査による解明を期したい。

（南部裕樹／東大寺・廣岡孝信／奈良県立橿原考古学研究所・

箱崎和久・山本祥隆）



図212 創建塔・再建塔の東面階段南端部分（2区、東から）



図213 創建塔の基壇外装（2区、南東から）